



(財) 広島平和文化センター
Hiroshima Peace Culture Foundation

〒730-0811 広島市中区中島町1番2号
TEL(082)241-5246(代表) FAX(082)542-7941 E-mail:p-soumu@pcf.city.hiroshima.jp
平成23年(2011年)2月/年3回発行 [URL]http://www.pcf.city.hiroshima.jp/hpcf/

2010年ノーベル平和賞受賞者世界サミット が開催されました



開会セッションで歓迎の挨拶を行う秋葉広島市長



セッションでの討論の様子

欧州以外での初のサミット

昨年十一月十二日から十四日までの間、ノーベル平和賞受賞者世界サミットが被爆六十五周年という節目を迎えた広島市において、「ヒロシマの遺産・核兵器のない世界」をテーマに開催されました。このサミットは、歴代のノーベル平和賞受賞者が一堂に集い、平和について討論を行うものですが、今回が欧州以外で行われる初めてのサミットとなりました。

このサミットの成功に向けた支援を行うとともに、地元の歓迎気運の醸成を図るため、広島市は、広島県、広島商工会議所及びユニタール広島事務所とともに、二〇一〇年ノーベル平和賞受賞者世界サミット支援推進協議会を設立し、サミットの主催者であるノーベル平和賞受賞者世界サミット常設事務局と緊密に連携を図りながら、会場の借上げや設営を行うとともに、運営に必要となる同時通訳の提供などを行いました。

サミットには、フレデリック・デクラーク元南アフリカ共和国大統領やダライ・ラマ法王など六名のノーベル平和賞個人受賞

目次

ノーベル平和賞受賞者サミットが開催されました。…………… ①～②
世界各国の若手外交官へ「ヒロシマの心」を伝える/
アルゼンチン・ブエノスアイレス市等を訪問/ヒロシマ・メッセンジャー決定 …… ③
被爆体験記「閃光・忘れぬあの日」…………… ④
シリーズ講座「広島の平和思想を伝える」/イスラム教国で原爆展 …… ⑤
「姉妹・友好都市の日」記念イベント/デュポール大学の「広島・長崎講座」現地学習… ⑥
あなたがうごく。世界が変わる。「国際交流・協力の日」…………… ⑦
平成23年 追悼平和祈念館 企画展
「しまってはいけない記憶—さし出された救いの手—」…………… ⑧

市民が描いた原爆の絵「黒い雨」/収蔵資料の紹介「8月5日、最後の日記」/
平和記念資料館 企画展「こどもたちの見た戦争」…………… ⑨
資料調査研究会 研究成果を発表/第28回ヒロシマ平和書道展/
被爆体験を映像に記録 証言ビデオの制作中 …… ⑩
第25回子どもたちの平和の絵コンクール/被爆体験証言者交流の集い …… ⑪
日本語サポーター養成講座/留学生のための就職実践学習会/ごみ工場見学 …… ⑫～⑬
留学生会館まつり …… ⑭
“平和について思う”「広島と平和」…………… ⑮
“ヒロシマの心”を発信する人々「ひろしまと世界を結ぶこども文庫」…………… ⑯



原爆死没者慰霊碑を参拝する個人受賞者たち

者と、国連（UN）や国際原子力機関（IAEA）など十三のノーベル平和賞受賞者団体代表者が参加され、十一月十二日から十一月十三日まで二日間に行われ六つのセッションが行われるとともに、十一月十四日には平和記念公園において平和アピールが行われました。

最終日に行われた平和アピールでは、世界平和のため、継続的な活動を熱心に行ってきたイタリアのサッカー選手であるロベルト・バッジョ氏に平和サミット賞が授与されることも、被爆の惨禍を生き延びた被爆者の皆さんの苦しみと勇気に敬意

を表し、世界にあまねく核兵器の恐ろしさを伝えるために自らの人生を捧げて来た被爆者を称え、被爆者を代表して日本原水爆被害者団体協議会に平和サミット特別賞が授与されました。

そして、サミットを統括する形で「核兵器廃絶条約」の実現に向けた取組など具体的な六つの提言が盛り込まれた「核兵器廃絶に向けた広島宣言」が発表され、核兵器廃絶のための具体的な行動につなげるために「ノーベル平和賞受賞者行動委員会」を立ち上げる決定がなされました。平和アピールの最後に、こうした成果に至る上で広島の結果とした役割をベルトロニーニ共同議長が日本語を使って「ありがとう広島」という二語で締めくくって下さるなど、サミットは成功裡に終わりました。

英知に直接触れる絶好の機会となりました。

市民や若者の参加

サミットには、多くの市民の皆さんの参加がありました。セッションに約二千五百五十人、平和アピールに約七千人、合わせて約一万人の市民が参加し、セッションにおける議論などを通し、ノーベル平和賞受賞者の



ロベルト・バッジョ氏への平和サミット賞授与

また、サミットでは、次世代を担う若い世代の活躍も目立ちました。サミットの運営に二百人を超える学生ボランティアが参加し、受付や通訳、イベントの実施に活躍するとともに、セッションに約四百人の学生が全国から参加し、平和問題に関し世界の英知を代表する人たちの議論を聴講するのみならず、活発な質疑を行いました。

十一月十二日に行われた開会セッションでは、広島市立職町小学校の児童約百三十人による合唱や歓迎の挨拶、広島市立工

業高校の生徒によるノーベル平和賞個人受賞者の方々への金工折鶴の贈呈が行われ、十一月十四日に平和記念公園で行われた平和アピールでは、受賞者の方々の入退場の際、広島市立舟入高校の生徒による吹奏楽演奏が行われるなど、次世代を担う若者たちがサミットを大いに盛り上げました。

世界に向けた発信

今回のサミットは、歴代のノーベル平和賞受賞者が被爆地広島に集い、核兵器廃絶に向けた今後の行動について議論するということで、世界的な注目を集め、国内外のマスコミ五十六社から延べ三百四名もの報道関係者が取材に訪れました。

その結果、サミット期間中、連日全ての新聞紙面で報道され、国内におけるテレビ報道は延べ三時間二十分以上にも及び、NHKやテレビ東京ではサミットを題材とした特別番組が制作・放送されました。また、イギリスのBBCやアメリカのCNN、ドイツ国営テレビ、フランスのAFP通信などの海外マスコミによって全世界にも報道される



日本原水爆被害者団体協議会への平和サミット特別賞授与

など、今回のサミットは、広島から世界に向け強力に情報を発信する絶好の機会となりました。

サミットで発表された「核兵器廃絶に向けた広島宣言」は、昨年七月に行われた「二〇二〇核廃絶広島会議」で採択された「ヒロシマアピール」の内容と方向性を同じくしており、今後の受賞者の行動が、広島、長崎や平和市長会議の取組と大きな相乗効果をもって、核兵器廃絶に向けた国際的なうねりをさらに大きくしていくものと期待されます。

（市民局平和推進課）

世界各国の若手外交官へ「ヒロシマの心」を伝える

各国政府の軍縮専門家の育成を目的とする国連軍縮フェローシップ計画の参加者（二十五か国）一行が、昨年九月二十五日（土）から九月二十六日（日）まで広島市を訪れ、視察やセミナーを通して被爆の実相や「ヒロシマの心」について学びました。

同計画は国連が一九七九年から実施している研修事業で、広島には一九八三年から毎年訪れ、今回で二十八回目となり、これまでに七百人を超える参加者が来広しています。

二十五日（土）午後、広島に到着した一行は最初に広島平和記念資料館を訪れ、山根眞裕美副館長（啓発担当）から説明を受けた後、同館を見学しました。

その後、外務省から「非核特使」の委嘱を受けた、元広島平和記念資料館長の高橋昭博氏の被爆体験を聴講しました。「非核特使」とは、国内外で核兵器の悲惨さを訴えるために菅直人首相が八月六日の平和記念式典で提唱したもので、高橋氏はその第一号として任命されました。

翌日、一行は爆心地、原爆ドーム、原爆の子の像、国立広島原爆死没者追悼平和祈念館の見学、原爆死没者慰霊碑への献花、岩崎学・市長会議担当課長による平和市長会議についての説明



被爆証言に耳を傾けるフェローズ

映画『ヒロシマ・母たちの祈り』の鑑賞など、充実した広島での研修プログラムを行いました。

参加者からは、「広島への訪問で核兵器の被害を知ることができた。原爆犠牲者のメッセージを伝え続けていきたい。」平和市長会議は素晴らしい取り組みであり、全世界に広めるべきである。」等の声が寄せられました。

（平和連帯推進課）

アルゼンチン・ブエノスアイレス市等を訪問

秋葉忠利・広島市長は、昨年十月十日（日）～十月二十日（水）、ブエノス

アイレス市及びマルデルプラタ市を訪問し、「ラテンアメリカ自治体週間」の関係行事、また、非営利の民間国際教

「姉妹・友好都市の日」記念イベントで活躍ヒロシマ・メッセンジャー決定

広島市と本財団は、海外の六姉妹・友好都市ごとに「姉妹・友好都市の日」を定め、それらの日を中心に、広く市民が参加できる記念イベントを開催し、姉妹・友好都市との交流の拡

大と友好親善の促進を図っています。「ヒロシマ・メッセンジャー」は、「姉妹・友好都市の日」記念イベントの企画・立案への参画、司会進行を行うなど、姉妹・友好都市について市民の理解を深める活動に携わります。平成二十三年のメッセンジャーを、昨年十月一日から三十一日まで公募し、選考の結果、都市ごとに男女各一名、計十二名を決定しました。【活動依頼期間 本年一月一日～十二月三十一日】

（国際交流・協力課）

活動への協力を求めました。

次に、ベドロ・モロビウイ連邦議会上院事務局長、元教育相のダニエル・フィルムズ上院議員と面会し、来年の核軍縮のための特別な会議の開催に向けた協力を要請しました。

十月十五日（金）

ブエノスアイレス市立高等語学院で中高校生と交流した後、在亜十九年の相川知子さん（広島出身）を中心に設立された「フンダシオン・サダコ（サダコ財団）」主催の佐々木禎子さんに関するポスター展を視察し激励しました。

十月十六日（土）

マルデルプラタ市で開催された「ラテンアメリカ自治体フォーラム」に出席し、世界が協力して核兵器を廃絶するよう求めるスピーチを行いました。

十月十八日（月）

ブエノスアイレス市で開催された「AFS世界平和フォーラム」に出席し、

平和市長会議の活動への理解と協力を求めるとともに、ラテンアメリカ諸国がリーダーシップを発揮し、二〇一五年の核兵器禁止条約の発効と二〇二〇年までの核兵器廃絶を実現させようと訴えました。

（平和連帯推進課）



平和市長会議とラテンアメリカ自治体協議会との協力関係確認文書への署名（10月13日）



プロフィール
 [もりた せつこ]
 昭和7年11月22日生まれ。広島県立広島第二高等女学校の1年生だった12歳の時、爆心地から約2キロの東練兵場で被爆。56歳から、被爆を語り継ぐ会や、広島県原爆被害者の会等で被爆証言活動を始め、昨年からは本財団の被爆体験証言者として登録。海外での平和活動にも参加し、昨年5月にはニューヨークで、今年2月にはパリで、被爆体験証言を行った。

被爆体験記

せんこう
閃光・忘れえぬあの日

財団法人広島平和文化センター 被爆体験証言者

森田 節子

連日の重労働で疲れきった私達ですが、八時から草取り作業をはじめました。その十数分後です。突然するどい閃光と爆風におそわれて、身体は宙に飛んだのです。数分間は失神していたようですが、気がつくと周囲はうす暗く、煙が漂う中から次々と立ち上がってくる亡霊のような姿に驚きました。みんな、髪はちぢれて、服は上下ポロポロに焼かれて、声もなく震えています。



東練兵場（「市民が描いた原爆の絵」森田節子さん作）

憧れの女学校に入学したのは、終戦の四ヶ月前でした。物資不足の戦時下では制服もそろえられなくて、黒い服地に白縁二本、白タインに梅の校章。学年に二組しかない、家の近くの第二県女（広島県立広島第二高等女学校）です。学校ではじめて夏服のブラウスを縫ったのですが、色は白ではなくて、セラー服は禁止されていました。動員学徒（*1）の女子はみんな「もんぺ」（*2）姿です。

八月六日は学校別に場所が決められて、建物疎開（*3）組と農作業組に分かれ、二年生西組は当時の雑魚場町（広島市役所の近く）に、他の二、三年生の三組は広島駅北口近くの東練兵場の島に向かいました。

悪夢をみているようで、私も自分の姿が気になります。私は両腕が焼かれています。左腕内側は指先まで皮膚がたれ、右腕外側は肘の皮膚が破れ、手首から先は水ぶくれで、ズボンの右後ろから裾まで火傷でした。後ろから被爆したのでしょうか。

顔にケロイドが出来た一年生の生き残りは、思春期、青春期をかくれるように生きたそうです。私は子供に恵まれず寂しい半生でしたが、今は証言活動で子供達と出会って励まされています。

担任の若い女先生も重傷でしたが、数人ずつ集まって近くの神社（広島東照宮）に避難しました。水筒の水をかけ合って痛みを抑え乍ら、救援を待っていました。誰も来ません。街中が黒煙と炎にまかれて、この世とは思われない凄惨な姿の人の群れが、異様な叫び声を上げてこちらの方に近づいてきます。

学校の近くの我家は半壊で残っていて、父母は軽傷で生きていてくれました。私の怪我が、腐った様なにはいのする中で、父母の必死の看病で、三ヶ月位いで治りました。

【文中*印部分補足説明】
 (*1) 労働力不足を補うため、工場などの労働に強制的に動員された生徒・学生。
 (*2) 足首の部分で裾を絞った、ゆったりした女性用作業ズボン。
 (*3) 空襲により火災が周辺に広がるのを防ぐために、あらかじめ建物を取り壊して、防火地帯を作ること。
 (*4) ワラなどの草で編まれた敷物。
 (*5) 二〇〇九年、広島県原爆被害者団体協議会発行。広島県内の主な図書館や大学に寄贈された。

被爆後のおよそ十年間の、私の思春期、青春期の思い出を『空白の十年』被爆者の苦闘（*6）とに分かれて、当時用品にあった学校に向かいました。市内には入れないので、駅から軍用列車の線路をつたって南へ向かいました。途中、猿猴川にかかる鉄橋を渡るときは、足を踏み外した人が川に落ちたようです。川には上流から死体が流れていました。

学校は残っていましたが、建物が壊れていて中に入らず、すぐ隣にあった女子専門学校に助けを求めて入りました。教室、廊下、運動場の「むしろ」（*4）にも重傷者がいっぱいでした。翌日の午後、救護の車が助けにきました。

学校は残っていましたが、建物が壊れていて中に入らず、すぐ隣にあった女子専門学校に助けを求めて入りました。教室、廊下、運動場の「むしろ」（*4）にも重傷者がいっぱいでした。翌日の午後、救護の車が助けにきました。



昨年5月、ニューヨークの国連本部内で開かれた原爆展で証言活動を行う森田さん（左から2番目）

シリーズ講座

「広島への平和思想を伝える」

被爆六十五周年となった今年度、平和を希求し核兵器の廃絶を願うヒロシマの思想を生み出してきた先人の考えや行動を知り、後世に伝えていくため、シリーズ講座「広島への平和思想を伝える」を開催しました。

第一回講演会

平成二十二年十月二日(土)

第一回目は、ノーベル文学賞受



講演される大江健三郎先生

賞作家であり『ヒロシマ・ノート』の執筆をはじめ広島との関わりが深い大江健三郎先生が「私が『ヒロシマ以後』に学んだこと」と題し講演されました。

大江先生は『ヒロシマ・ノート』に書かれた重藤丈夫先生や金井利博氏の姿を始め、幅広い視点から平和について分かりやすく話されました。

また、若い人たちへのメッセージとして、「ヒロシマの思想を理解し、核兵器廃絶と世界恒久平和の実現を願う広島市民の思いを後世に伝えるために行動しよう」と呼び掛けました。

講演会には広島市民だけでなく、福岡、京都、東京、仙台などから駆け付けた人も含め、約千二百人の参加者を得て大変盛況でした。

参加者からは、「大江先生の誠実で具体的なお話に感銘を受けた」、「広島・長崎の被爆をポジティブな面から訴えることが大切だと同感した」、「ヒロシマ市民として重要なメッセージを頂いた」、「次の世代に継続していこうと思

った」、「(御子息の)光さんの音楽に安らぎを感じた」といった感想が多く寄せられました。

講演会は、若い世代を始め参加者の皆さんが、ヒロシマの心や核兵器のない世界の実現を目指し行動していくための貴重な第一歩となりました。

第二回講演会

平成二十二年十一月四日(土)

第二回目は、広島市立大学「平和インターンシップ」事業と連携して実施しました。

被爆とともに生きる広島の記事として核兵器の問題を人間の側から見つめ続けた新聞記者、金井利



講演される小池聖一先生

イスラム教国で原爆展

独立行政法人国際協力機構(JICA) 国際協力推進員 植松 弥穂

二〇一〇年十二月九日にモルディブ共和国で行われた「第五回日本モルディブ祭り」の中で、広島県出身青年海外協力隊員の新田郷司さんらが「原爆展」を開催しました。

今年の祭りのテーマは「環境保護」。その中で、戦争や核兵器使用が自然や生活環境に与える影響を示しながら、平和や命の尊さを訴えました。

モルディブはイスラム教の国。ポスターや記録映像も女性の肌の露出、慰霊碑など他宗教を連

想させる部分はカットせざるを得ない等、準備には相当苦労しましたが、近隣に核保有国のあるモルディブの人々にも、核兵器を身近な問題として認識してもらおう事ができました。



原爆展でポスターに見入る人達

かつ客観的に話されました。

講演会には広島、福岡、山口などから駆け付けた人も含め、約二百五十人の参加者を得ました。

参加者の皆さんからは、小池先生の「先生の温厚で具体的なお話に魅了された」、「金井利博の三つの思想が印象的だった」、「原爆報道に関する変遷がよくわかった」、「広島大学文書館を訪れたい」といった感想が数多く寄せられ大変好評でした。

(平和連帯推進課)

「姉妹・友好都市の日」記念イベント 市民が海外文化を堪能

広島市は海外の姉妹・友好都市提携六都市に対し、市民の方々に一層親しみと理解を深めていただくため、「姉妹・友好都市の日」を設けて記念イベントを開催しています。

重慶の日
昨年十月十七日(日)、広島市留学生会館で記念イベントを開催しました。主催ー平成二十二年度重慶の日実行委員会

まず来場者は、二種類の中国茶の試飲、その茶葉を利用した二種類の点心、茶叶蛋(煮卵)と茶葉ケーキ、そして四川風焼豚の試食に舌鼓を打ちました。

その後、重慶市からの国際交流員が重慶市の街並みや食生活など重慶市民の暮らしを分かりやすく紹介しました。

記念コンサートでは、重慶市出身で広島文化学園大学の留学生施杉さんによる箏の演奏に始まり、日本中国友好協会広島支部の皆さんによる太極拳と「三十二式太極



趙栄春さんのコンサート(「重慶の日」記念イベント)

劍一の表演、来場者全員で太極拳の体験、広島市在住の二胡奏者趙栄春さんのコンサートをを行い、最後は趙さんの伴奏により全員で日本語と中国語の「故郷」を合唱しました。

このほか、重慶市の特産品や書の展示を行いました。三百人の来場者は、楽しみながら重慶市や中国への理解を深めていました。

ホノルルの日

昨年十一月六日(土)、広島駅南口地下イベント広場において、「ホノルルの日」記念イベント「ホノルル・フラパーティー」を開催しました。主催ー平成二十二年度ホノルルの日実行委員会

古典的なフラ「カヒコ」の演舞によるオープニング、開会セレモ

ニーの後、ヒロシマ・メッセセンターとアメリカ出身の国際交流員元外国語指導助手の四人が、映像を使い、ホノルル市の歴史、食文化、観光地などを紹介しました。続いて三組のハワイアンバンドとフラチームが、本格的なステージを繰り広げ、会場は南国ハワイの華やかな雰囲気包まれました。合間には、ハワイアングッズの当たるクイズで大いに盛り上がり、最後は、出演者と来場者が一緒にフラを踊り、「愛するハワイ」を合唱してイベントを終了しました。

会場では、ハワイアングッズの展示販売やリボンレイ製作体験もあり、約五百人の市民が、アメリカやホノルル市について理解を深めていました。

(国際交流・協力課)



ハワイアンバンドとフラのステージ(「ホノルルの日」記念イベント)

デュポール大学の「広島・長崎講座」 三回目の現地学習

広島市と長崎市では、被爆者の「他の誰にも同じ思いをさせてはならない」というメッセージに込められた平和への「思い」を学問的に整理・体系化し、普遍性のある学問として若い世代に伝えるため、世界の大学での「広島・長崎講座」の開設・普及に取り組んでいます。

昨年十二月六日(月)〜十二月十一日(土)、米国・デュポール大学の学生一行二十二名が、二〇〇五年、二〇〇七年に続き、三回目となる広島での現地学習を実施しました。

この講座は、同校が開設している「海外学習講座」の一つで、被爆地広島への訪問を通して、新旧の日本文化に触れるとともに平和問題について学ぶものです。

広島での滞在期間中、一行は、平和記念資料館や国立広島原爆死没者追悼平和祈念館の見学、原爆を題材とした詩の聴講、被爆体験証言者の笹森恵子氏、肥田舜太郎氏による被爆体験証言の聴講、

広島平和研究所研究員との意見交換会、平和記念公園内を巡るフィールドワークなど様々な内容の平和学習を受講することで被爆の実相について理解を深めました。

十二月七日(火)には、秋葉市長を訪問し、市長から「学生の皆さんが広島で学ぶことは、平和な世界を創るため、特に核兵器廃絶の実現のために非常に重要です。広島訪問で学んだことを活かして、皆さんが二十一世紀のために重要な貢献をしてください」と激励を受けました。学生たちは、市長が平和問題や核兵器廃絶に取り組むようになったきっかけや、平和市長会議の活動とその成果などについて質問し、市長の説明を熱心に聴いていました。

(平和連帯推進課)



平和記念公園を見学

あなたがうごく。世界がかわる。

平成二十二年度 「国際交流・協力の日」

平成二十二年十一月十四日

(日)、広島国際会議場、広島平和記念資料館東館などで二十七の催しを開催しました。

十一回目となるこのイベントには延べ六千八百人が参加し、国際交流・協力について学びました。

☆「地球のステージ」 〜特別版〜

国際医療救済活動を展開されている桑山紀彦さん(山形在住の精神科医)が案内役となって、ライブ演奏と大型映像を使って、世界で起きている様々な出来事を紹介しました。参加者は普通の講演会では味わえない深い感動を覚えることができました。



「地球のステージ」特別版

広島では初公演となる「ミュージカル版」では、スクリーンに映し出された現地の人とステージ上の桑山さんが会話をしながら進める内容で、緊迫した現場の様子を体感することができました。

「ヒロシマ篇」では、被爆体

験証言者として当時の体験を語

り継ぐ人や、「過去の戦争に学んで今の学校を建て直そう」といじめをなくすために「平和を学ぶ」活動をする中学生の取組の様子から、平和教育の大事さについて考えさせられました。

「パレスチナ篇」は昨年六月のイスラエル・ガザ地区でのエピソードで、たび重なるイスラエル軍の空爆で心に傷を負ったパレスチナの子どもたちと、彼らの傷を癒そうと活動する桑山さんの交流に心を打たれました。

最後に、多くの参加者による活発な意見交換が行われ、国際交流・協力への関心の高さがうかがえました。

☆世界の料理と民芸品バザー

国際会議場南側の平和大通り緑地帯では、世界の様々な屋台料理を販売しました。また、国

☆活動の紹介

市民団体、大学や企業・団体等がブースを設け、それぞれの国際交流・協力活動に取り組む

内容を紹介しました。会場にはNPO設立やNGO活動についての相談コーナーを併設しました。

☆日本伝統文化の紹介

着物の着付けや茶道、いけばな、手描き友禅の体験を実施しました。外国人に日本文化に触れてもらい、日本人には自国の文化を再認識してもらうことができました。

☆親子で楽しむ

イベント会場をまわってクイズに答えるとプレゼントがもらえるクイズラリーや、粘土遊びを通して世界の文化を学ぶコーナー、世界のあそびの紹介など、親子で楽しめる催しを開催しました。

☆環境を考える

世界遺産であるガラパゴス諸島の抱える環境問題に関する講演や、平和記念公園内のフィールドワークを通して、地球環境について学びました。また、環境保護への取組として、屋台の会場ではリユース食器を使用しました。

☆多文化共生社会に向けて

在住外国人を取り巻く諸問題を抽出するための座談会や、多文化共生をテーマとした講座、外国人のための無料相談会など、外国人市民との共生社会の実現に向けた催しを開催しました。

このほかにも、英語によるイベント(討論)の体験や、広島と世界の若者による意見交換、鍵盤ハーモニカや世界のコインを寄贈することで世界の子どもたちを支援する催しなど、多種多様な催しを開催しました。

(国際交流・協力課)



世界の遊びの紹介

平成二十三年 国立広島原爆死没者追悼平和祈念館 企画展

しまつてはいけない記憶

ーさし出された救いの手ー

期間ー平成二十三年一月三日(日)ー十二月二十八日(水)
場所ー追悼平和祈念館 地下一階 情報展示コーナー
入場ー無料

国立広島原爆死没者追悼平和祈念館では、被爆の実相を伝えるため、毎年テーマを定めて企画展を開催し、被爆体験記や追悼記などを展示しています。

今回はさし出された救いの手」と題し、被爆の惨状の中で助け合う人々の様子を紹介しています。

昭和二十年八月六日に投下された原子爆弾により、広島は一瞬にして壊滅的な被害を受けました。瓦礫の下で助けを求め、瀕死の状態に逃げ惑う人、皆が我が身のことです。精一杯でした。こうした中でも家族や友人、あるいは見も知らぬ人のために必死で救出活動をする人や、貴重な食べ物・衣服を提供する人、寝食を忘れて看護に携わる人々がいました。火の迫る中での救出、思いもかけぬ親切、必死の看護。苦しい時にさ

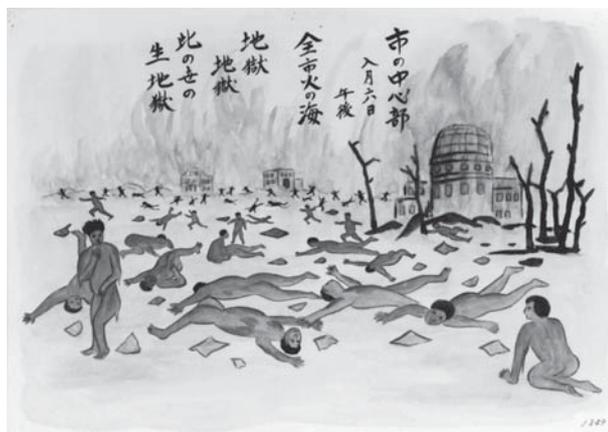
し出された救いの手は、希望を失いかけた被災者に生き抜く勇気を与えました。

今回、展示している被爆体験記の中から、南恭子さんと山中恵美子さんの体験記(抜粋)をご紹介します。

南さんは当時七歳、路上で遊んでいる時に被爆しました。

……私が七歳の八月六日、朝は晴天で太陽がきらきらと輝き、目にはまぶしく暑い一日が始まっている。

父と長男は兵隊にとられて、家には居ない。母は勤労奉仕に行った。私は八時頃から、子供達がよく遊びに行く、近くの



「市民が描いた原爆の絵」 中野健一さん作

風呂屋に行つて四く五人、道路で遊んでいた時である。

原爆が投下された瞬間に吹き飛ばされて、家の中で気がついた。黒煙で真っ黒で何も見えない。しばらくすると、小さな光がわずかに目に入ってきた。その光を頼りに歩いて行くと、格子戸の玄関であった。外に出ると、すでに狭い道は瓦がいっぱい散乱し、歩く

にも困難な状態で人々は泣き呼び、大人も子供も流血し火傷で顔の皮膚がずるりとむげ、ぶら下がっている。又、背中や腕足も水泡ができた人々で、右往左往と走っている。

私も何が何か分からず、人の後をついて走った。……

山中さんは当時十一歳、切れた下駄の鼻緒を纏っている時に被爆しました。

……はっと気が付いた途端、私は「助けてえ、助けてえ」と叫びました。すると軍靴を履き、黒いゲートルはぼろぼろで、前掛けを掛けたようなおじさんが「どこじやあ、どこじやあ」と言つて声をかけてくれました。私は埋まっていたので、おじさんの足元と前掛けがぶら下がっていたことだけを覚えています。「おじさん、助けてえ、助けてえ」と言つたら、おじさんが瓦礫をのけて、手を差し伸べて下さいました。私がおじさんの手をつかむと、手の皮がズルツとむけました。腐りかけたバナナを持ったら、ジュツと抜けるような感覚で、とても嫌でした。そうしたらおじさんがお互いの指を引っ掛け合うようにして引っ張り出してくれました。その時は助かってよかったと思うだけで、お礼も言えませんでした。……

この体験記の全文は、当館の体験記閲覧室もしくは<http://www.hiro-tsuitokinenkan.go.jp/notice/info.php?id=122&from=top>をご覧ください。

<http://www.hiro-tsuitokinenkan.go.jp/notice/info.php?id=122&from=top>をご覧ください。

会場では、体験記とともに、被爆者が描いた絵や衣服などの被爆資料も展示しています。また、体験記を、関連する写真や絵を用いた映像と音声で紹介し、被爆の悲しさを訴えています。この映像については、過去の企画展で制作したのもも含め、体験記閲覧室でも観ることが出来ます。

被爆者の「こころ」と「こぼれ」にふれてください。

(原爆死没者追悼平和祈念館)



企画展会場の様子

広島平和記念資料館企画展 こどもたちの見た戦争 —はだしのゲンとともに—

■期間：7月11日(月) まで
■会場：平和記念資料館
東館地下1階 展示室(5)



「絵本はだしのゲン」原画より 寄贈／中沢啓治氏

「はだしのゲン」は、広島市出身の漫画家中沢啓治氏による作者自身の被爆体験をもとにした漫画です。作者の分身である主人公中岡元が、原爆で家族を失いながらも、戦後をたくましく生き抜いていく姿が描かれています。

企画展では、ゲンが目の当たりにしたこと、体験したことを紹介しながら、当時の子どもたちが戦時中どんな生活を送っていたのか、また、原爆投下によって子どもたちに何が起こったのか、その一端を伝えます。

- （展示構成）
- 戦時中の市民生活
- 国民学校
- 学童疎開
- 原子爆弾投下
- 学校の再開
- たくましく生きる子どもたち
- 中沢啓治コーナー
（お問い合わせ）
平和記念資料館学芸担当まで
☎（082）241・4004

市民が描いた原爆の絵 今回のテーマは 「黒い雨」

昭和四十九年（一九七四年）、NHK広島放送局に被爆者から寄せられた一枚の絵がきっかけとなり、同放送局の呼びかけで市民から二千二百二十五点の絵が寄せられ、後に広島平和記念資料館に寄贈されました。平成十四年（二〇〇二年）には当館、NHK広島放送局及び中国新聞社が「原爆の絵」を募集し、千三百三十八点が寄せられました。

その後も「原爆の絵」は描かれ続け、今もなお寄せられています。当館では、それらの中から毎年テーマを定め、作品を展示しています。

今回は「黒い雨」をテーマに、「きのこと雲」、「竜巻」、「落下物」、「雷」、「黒い雨」という五つのコーナーで、作者のことばとともに三十六点の作品を紹介しています。

当時、「黒い雨」の正体について情報がない中、「黒い雨」は被爆者の目にとるように映ったのでしょうか。また、被爆者ほどのような思いで絵を描いたのでしょうか。



作者 高蔵信子さん

これらの絵を通して、原爆被害の実相をご理解いただき、被爆者の思いを感じていただければと思います。

- 会場 平和記念資料館東館 地下一階展示室(三)
- 期間 平成二十三年十月まで
- お問い合わせ
平和記念資料館学芸担当
☎（082）241・4004

黒い雨

原子爆弾の爆発後に降った雨。黒く粘質で、放射能を帯びたチリやススなどが多量に含まれていた。平成二十年度（二〇〇八年度）に広島市等が実施した「原爆体験者等健康意識調査」の解析によると、現在の広島市域の東側と北東側を除く市域のほぼ全域と周辺部で黒い雨が降った可能性があるとされている。

収蔵資料の紹介

八月五日最後の日記「県立広島第一高等女学校」年生の日記から！
八月六日、原爆の投下により、生徒動員で建物疎開作業に従事していた、県立広島第一高等女学校の一年生約二百二十名全員が亡くなりました。

生徒たちは被爆前日まで、入学式の日配られた日記帳に、日々の生活を個性豊かに綴っていきました。しかし翌日、一発の原子爆弾によって子どもたちの未来は断ち切れられ、八月六日の日記が記されることはありませんでした。

- 展示期間 平成二十二年十月七日(木)～平成二十三年四月六日(水)
- 展示場所 平和記念資料館東館三階 ミュージアムショップ前
- 展示資料 八月五日の日記、被爆当日に着ていた制服、形見となった絵など実物資料五点、市民が描いた原爆の絵二点、複製パネル一点、遺影三点

【参考】

このコーナーは、テーマを変えて六月ごとに展示替えを行います。今回のテーマは「家族の面影—遺族の悲しみ」の予定です。

（平和記念資料館学芸担当）

資料調査研究会研究発表会 核をめぐる動 向など研究 成果を発表

平成二十二年十一月二十七日（土）、広島平和記念資料館資料調査研究会の研究発表会が開催され、四人の研究者が発表しました。

○石丸紀興いしまのりおき 会長（広島国際大学教授）



「世界の戦後復興における計画思想としての平和都市・平和記念都市の提案・形成・成立過程に関する研究―広島に対する外国人からの提案を中心として」と題し、広島市の復興顧問であったモンゴメリーらの提案を紹介しました。

○北川健次きたがわけんじ 次会員（広島大学名誉教授）



「戦災と復興―欧米のみた広島原爆の被害」と題し、アメリカ・ドイツ・フランス・イギリスの

社会学者が広島市の復興にどのような関心を示したかを報告しました。

○舟橋喜恵ふなはしよしえ 副会長（広島大学名誉教授）



「学校における平和教育 広島」の歴史と現状」と題し、平和教育の変遷や現状について報告しました。

○水本和美みづもとかずみ 会員（広島市立大学広島平和研究所副所長）



「最新の核をめぐる動向と論調」と題し、オバマ政権の核政策をはじめ、最近の国際情勢について解説しました。なお、同研究会の研究成果は、報告書にまとめて五月ごろに発行する予定です。

【お問い合わせ】平和記念資料館学芸担当まで。
☎（082）241・4004

広島平和記念資料館資料調査研究会とは

平成十年（一九九八年）に設立。物理学、平和教育、国際関係などの有識者で構成し、研究成果は資料館の展示などに反映されています。

第二十八回ヒロシマ平和書道展 平和への熱い 思いを書に

本年度も全国から平和の尊厳と生命の尊厳を訴える作品を募集した「第二十八回ヒロシマ平和書道展」を開催しました。主催―ヒロシマ平和書道展実行委員会（構成団体―毎日新聞社、毎日書道会、本財団）

広島県内を中心に、北海道から鹿児島まで、三歳から九十八歳まで幅広い年齢の方から、平和への願いを込めた五千四百七十九点の力作が寄せられました。

全作品に特別賞、特選、秀作、佳作、入選のいずれかの賞が授与され、このうち上位特別賞百七点の表彰式を、平成二十二年十月十七日（日）、広島平和記念資料館で行いました。

また、この日から十九日（火）までの三日間、同資料館内で、特別賞と特選入選作品、計千十四点の作品展を開催し、会期中千五十六人が訪れました。初日には全国から受賞者やその

家族らが会場を訪れ、作品の前で記念写真を撮りながら、喜びを分かち合う姿がたくさん見られました。
（平和記念資料館啓発担当）

文部科学大臣賞

〈幼年、小・中学生の部〉

広島県福山市新市中央中学校三年生

宮本佳織みやもとかおりさんの作品



〈高校・大学・一般の部〉

山口県石国市一般
田中美心たなかみしんさんの作品



被爆体験を映像に記録 証言ビデオ の制作中

被爆者の高齢化が進む中、被爆体験の継承が重要な課題となっています。このため本財団では、昭和六十一年度から被爆者の証言を映像に収録した被爆者証言ビデオを制作しています。

本年度は、広島県内の被爆者二十人の証言を収録する予定で、昨年八月三十日（月）から収録を始めました。三月末までに一本約二十分のオリジナル版二十本と、それを短縮して一本に三人分（一人約十分）の証言を収録したダイジェスト版五本を制作します。

制作したビデオは貴重な資料として保存するとともに、全国の学校などへ無料で貸出しています。また、インターネットで「広島平和記念資料館WEB SITE」の「平和データベース（被爆者証言ビデオ）」からも視聴することができます。

（平和記念資料館啓発担当）

第二十五回子どもたちの 平和の絵コンクール 多数の力作が寄せられる

平成二十二年十二月十八日(土)に広島平和記念資料館メモリアルホールにおいて、「子どもたちの平和の絵コンクール」の表彰式を開催しました。



大賞(中学校の部)
広島市立伴中学校 2年生 福長千紘さん



大賞(小学校の部)
広島市立梅林小学校 4年生 樋口知恵美さん

このコンクールは、子どもたちの平和への意識を高めるために昭和六十一年から開催しているもので、今回で二十五回目を迎えました。広島市内の小・中学校百三十二校から

四千三百四十九点、海外からは八カ国(カナダ、中国、韓国、ロシア、アメリカ、オーストラリア、フランス、インド)千五百八十七点、合計で五千九百三十六点の応募がありました。

表彰式には、大賞・特選受賞者のうち三十四名が出席し、賞状と記念品の楯を受け取りました。表彰式終了後は、展示室(5)で大賞受賞者等による作品展開会のテープカットを行いました。作品展は、平成二十三年一月三十一日(月)まで開催し、会場には大賞作品三點、特選作品三十九点、優秀賞作品百二十点、合わせて百六十二点の作品を展示しました。



大賞(海外の部)
テグ・シジ小学校(韓国) キム・ヨンウさん

小学校の部で折り鶴と子どもたちの絵を描き大賞を受賞した広島市立梅林小学校四年生の樋口知恵美さんは、「大賞を受賞することができ、とても嬉しい。私たちの笑顔を折り鶴と一緒に世界中に送り届けることで、平和な世界が訪れて欲しいという思いを込めて描いた」と語ってくれました。中学校の部で、森の中で錆び付く核兵器を描き大賞を受賞した広島市立伴中学校二年生の福長千紘さんは、「核兵器廃絶が実現され、核兵器の存在自体が忘れ去られる日がいつか訪れてほしいという願いを込めた。来年度がコンクールへ応募することができる最後の機会となるので、また応募できるように頑張りたい」と話してくれました。

なお、大賞・特選受賞者の名前

と作品及び優秀賞受賞者の名前は、広島平和記念資料館ホームページ(<http://www.pcf.city.hiroshima.jp/>)の「キッズ平和ステーション」から見ることができます。

(平和記念資料館啓発担当)

「被爆体験証言者交流の集い」 研修会を開催

本財団が事務局を務める「被爆体験証言者交流の集い」では、被爆体験証言者活動を行っている方だけでなく、広く市民の皆様にもヒロシマについて学び機会を提供するため、年一回、公開講座を開催しています。本年度の第一回は平成二十二年十二月四日(土)に「NPT(核不拡散条約)再検討会議の成果と意義」参加報告」をテーマに、国際交流NGO「ピースボート」共同代表の川崎哲氏と本財団のステイブン・リーパー理事長にお話しいただきました。

第一部では、まずリーパー理事長が平成二十二年五月に米国・ニューヨークで開催されたNPT再検討会議の報告とその成果について、今ではほとんどの国が核兵器



第1回公開講座の様子

世界の核兵器をなくすためには、この二〜三年が重要であり、人類の未来がかかっていることなどの話をしました。続いて川崎氏が、NGOだからこそできることや役割があること、被害者の訴えには大きな力があり、「広島」がある日本の皆さんが核廃絶を訴えていくことが重要であることなど、映像資料を交えながら話されました。第二部では、川崎氏とリーパー理事長が参加者からの質問を受け、それに答えました。

参加者からは「全世界が問題に取り組んでいる状況が良かった」、「日本ももっと活動すべきだと思った」などの感想が寄せられました。

(平和記念資料館啓発担当)

日本語サポーター養成講座

広島市留学生会館では、平成二十二年度から居住者支援の一環として「日本語サポーター制度」を設けることにしました。居住者の多くが日本語習得で苦労しています。日常会話から論文作成まで、様々な状況で日本語が必要であり、気軽に日本語について手助けしてくれる人が欲しいとの強い要望が寄せられていました。

初めての試みでしたが、居住者からのサポーターを紹介してほしいという申込みと、国際交流や留学生支援に関心のある一般市民の方々からのサポーター希望の双方が多数寄せられました。

第一回日本語サポーター養成講座は二〇二〇年十月二日（土）十三時から十五時まで、申込み先着順で十八名が参加しました。広島市立大学から岩田（いわた）一（かずゆ）成



日本語サポーター養成講座の様子

先生を講師にお迎えし、ワークショップとディスカッションを交えた楽しく有意義な二時間の講座になりました。

講座では、まず参加者が自己紹介しましたが、参加者のほとんどが留学生との交流経験が全くない人達で、どのように日本語を教えたらいいのかわからないといった不安と、留学生とのふれあいを楽しみにしているといった気持を述べられました。その後、岩田先生から「留学生にどんなサポートができるか」「ボランティアの心得」「日本語指導に役立つ本」の順に指導を受けました。実際に留学生

が書いた論文を読んで添削作業を行ったり、日常生活で行っている些細な事でも留学生にとっては役に立つ事などを話し合っ

て発表するなど、笑いや驚きを交えた講座になりました。

講座後の約一週間の間で、留学生会館担当者が参加者と留学生のマッチングを行い、それぞれのペアが会館のラウンジで感動の対面を行いました。サポーターの方々は、講座で教えられた「過度に責任を負わず、出来る範囲で、少しでも労力と時間をかけて楽しむ」、「日本語文法を教え込むのではなく交流を大切に」というポイントに気をつけながら、留学生との交流を深めていきました。

十二月十九日（日）には、フォローアップ相談会を行い、活動の中で疑問や相談があるサポーターが岩田先生にお聞きする機会を設けました。

サポーターの方々からは、「日本の文化や日本語について自分が勉強になっている」といった前向きな感想や、「毎回質問することをもメモに書いて来てくれ、熱心に聞いてくれるので、自分

が役に立っていることを実感している。本当に嬉しい。毎回会うのを楽しみにしている」といった感動いっぱい感想をいただきました。

また、留学生からは、「親切に教えてもらい、聞きやすい」、「論文作成で悩んでいたが、今ははかどっている」といった感想をいただきました。

今後、留学生の学業と日常生活の支援として、また、留学生と交流を深めていきたいと願っている方々を市民の方々と留学生の架け橋として、この「日本語サポーター制度」を充実させていきたいと考えています。

（広島市留学生会館）

留学生のための就職実践学習会

本財団では、平成二十二年九月十八日（土）から十月二日（土）までの毎週土曜日、全三回のシリーズで「留学生のための就職実践学習会」を開催しました。

日本で就職をしたいと真剣に取り組んでいる留学生七名（中国六名、ベトナム一名）が参加し、各分野の専門講師による指導を受けました。この学習会は、昨年度から少人数に絞り、個別のニーズに応じた、きめ細やかな指導を行うよう配慮して就職活動の支援をしています。

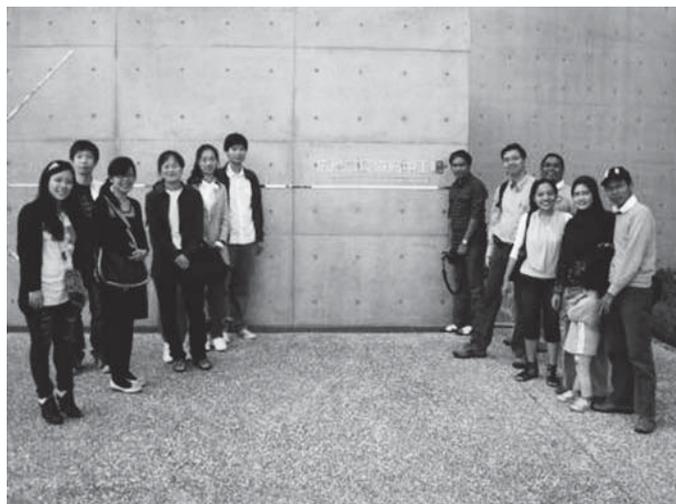
今年度は、昨年度のプログラムに新たに企業訪問のプログラムを加えました。九月二十九日（水）に市内の企業二社（元）企業に出向いたことによ

留学生が現在働いているホテルと、今後グローバル化を進めようとしている大手食品会社）を訪問しました。

ホテルでは、実際にフロントで働いている元留学生から、内定に至るまで努力したことや就職後の苦労話まで、採用担当者と一緒に話を聞くことができました。ホテル内も見学をさせていただきました。接客業の大変さを体験しました。また食品会社では、海外事業部と人事の担当者が同席され、会社の将来の展望や現在の採用状況、求められる人材など具体的な話を聞くことができました。

生活支援セミナー 「留学生の ためのゴミ 工場見学」

広島市留学生会館では、今年度の留学生生活支援セミナーを、年三回シリーズで行うこととし、既に昨年五月、六月と二回実施しました。そして、第三回目「留学生のためのゴミ工場見学」を



参加者全員で記念撮影

方より、家庭ゴミの搬出から広島市での最終処理までの過程についてビデオを用いながら説明していただいた後に、順路に従って工場内を見学しました。見学ポイントには日本語、英語の音声ガイドがあり、参加者に好評でした。参加者は巨大なクレーンによる大量のゴミの攪拌作業や、可燃ごみ燃

焼後にできるスラグ（灰のかたまり）などに見入っていました。また、燃焼過程で発生する蒸気利用による発電が行われていることにも興味深そうでした。さらに、工場内が静かであり、悪臭も無く清潔な様子、工場裏の海がきれいなことにも感心していました。参加者は真剣に見学を行い、有意義な体験をしました。見学後、ゴミについて再考する良い機会だったという感想や、自分の国にもこのような施設があればよいという意見がありました。今後とも留学生の日常生活に密着した実用的セミナーも目指していきたいです。

（広島市留学生会館）



熱心に説明を聞く留学生たち

て、自己紹介や名刺交換、挨拶など、これまで学習したことを即実践し、体で覚えることができたこと、このプログラムは留学生の間で好評でした。

これまで当会館研修室で開催した学習会は次の通りです。

第一回

『日本人とのコミュニケーション術/ビジネスマナー講座』
フリーアナウンサーの丸子（まるこ）氏を講師に招いて、挨拶の仕方やお辞儀の仕方、声の出し方、印象を三秒で定める方法などについて学習しました。

第二回

『就職の心構え・流れ・自己分析・失敗談・成功談』

広島労働局ハローワーク通訳の服部居宣（はっとりいせ）さん（元留学生）から、自己分析の必要性、将来に向けての自分の在り方（帰国を含めて）について、親身に個別アドバイスをしていただきました。

第三回

『実践面接指導』

面接官として、広島経済大学キャリアセンター課長梶山健治（はつやまけんじ）氏と広島修道大学キャリアセン

ター課長歳實（としざねいさお）氏を招き、参加者を二グループに分けて、個人面接の指導を受けました。参加した留学生のほとんどは毎回リクルートスーツで参加し、髪結び方や靴の選び方までチェックを受け、真剣に講師の方々の話に耳を傾けました。声の大きさからしゃべり方、履歴書の書き方まで、個別の問題を指摘していただいたので、必要な情報を具体的に学習できたと留学生には大変好評でした。

就職実践学習会に参加した留学生は、現在胸を張って県内外で就職活動を行っています。学習者の中から一人でも内定者がでることを願っています。

（広島市留学生会館）



マナー研修を受ける留学生たち

留学生会館まつり二〇一〇 「アリガトウ」の感謝を 込めて広がる国際交流の輪

留学生をはじめ在広の外国人と市民の皆さんとの交流を深めることに、留学生に社会参加の機会を提供すること等を目的として、平成二十二年十一月七日（日）、広島市留学生会館において、会館の一大イベントである「留学生会館まつり二〇一〇」を開催しました。

今年も昨年に引き続き、荒神地域の胡祭り、広島南授産所感謝祭と同時開催ということもあり、国際色豊かな様々なイベントは昨年より多い約二千六百人（留学生約二百五十人、外国人約百五十人、市民約二千二百人）の参加者でにぎわい、参加した方々にとっては楽しい一日となりました。主催―広島市留学生会館、広島地域留学生団体育成支援協議会、荒神地区社会福祉協議会。



屋台での楽しいひと時

十回目となる今回は、留学生そして留学生会館が、これまでにお世話になった方々に、まつりを通して感謝の気持ちを伝えるため、テーマを「アリガトウ―感謝」としました。また昨年に引き続き、留学生の意向を反映させるために入居留学生による企画委員会を設け、イベントの項

目、参加方法、広報、実施準備作業等についての企画会議を繰り返し行い、まつりの準備を行いました。その結果、昨年より各イベントの配分時間にめりはりがつき、充実した内容になりました。

午前十時、一階交流ラウンジでオープニングセレモニーが行われました。西村陽子留学生会館館長による挨拶の後、各国からの留学生が、今回の祭りのテーマである感謝の言葉「アリガトウ」を各自の母国語で順々に伝え、最後にセレモニーに参加してくださった市民の方々に日本語で「アリガトウ」と伝えました。その後、市民によるファンファーレ隊の「フッチーナ」による演奏があり、留学生会館まつり二〇一〇の華やかな幕開けとなりました。

屋外周囲の恒例の「お国自慢・味自慢 世界の各国料理屋台」では、十カ国から十四団体が出店し、各団体がバラエティに富んだ自慢の料理（ベトナムのフォー、イランのケバブ、中国の肉まんや餃子むすび、ネパールのプリ【揚げパン】等）に腕をふるっていました。今年度は、南側の駐輪場だけでなく、大州通りに面した北側にも屋台テントを設け、市民の方々と沿道の皆さんににぎわいを提供しました。

今年も、環境に配慮し、食器をプラスチック容器から紙の容器に統一して、ゴミの排出減量にも努め



クロージングセレモニーで話をする留学生

ました。

二階ホールでは午前中、日本語スピーチ大会を実施しました。日頃から留学生会館で活動されている日本語教室の受講生や、会館在住の留学生や外国人など六名が参加しました。今回の会館まつりのテーマの「感謝」を題材に、各自が感謝する人や気持ちについてスピーチしました。

午後の前半は、二階研修室も使用して、「WORLD EXPLORE」と題して、留学生による母国紹介を行いました。市民の方にとっては留学生や広島市の国際交流員と直接、興味がある国について話ができるということ、十九カ国・一地域のいずれのコーナーにもぎわっていました。また、「WORLD EXPLORER」の最後に、各コーナーの留学生が各国の独特の衣装を身にまとい、ステージに集合し世界の

民族衣装ファッションショーを開催し、大変好評を得ました。

午後後半では、五カ国九グループの留学生によるミニイベントを行い、中国の雑技であるディアポロや、イランの踊りを紹介しました。また、エリザベト音楽大学大学院の留学生による楽器の演奏も行われました。そして、今回は広島で活動されている車イスダンスクラブに「車イスダンス」を披露していただきました。

一階交流ラウンジでは、留学生会館まつり企画委員会委員長であるブルガリアからの留学生による折り紙の展示と、広島平和文化センターが推進するエコ活動の一環として、ゴミを恐竜の中に入れて恐竜工作を行っている造形グループ・サンタラ代表の亀井由美子さんの協力を得て、エコ恐竜の展示を行いました。この機会を通じて、留学生だけでなく市民の方々にもゴミのREFUSE（拒否）・REDUCE（発生抑制）・REUSE（再利用）・REPAIR（修理して使う）・RECYCLE（再利用）の大切さを学んで頂き、当財団の環境問題に対する姿勢についてご理解いただけたと思います。

最後に、クロージングセレモニーでは二階ホールに留学生が勢ぞろいし、「幸せなら手をたたこう」を合唱し、市民の方たちと一体となってフィナーレを飾りました。

（広島市留学生会館）

私は三十年以上広島に住んでおり、広島平和文化センターとの関わりも長年に渡ります。海外から友人が来ると、彼らは必ず平和記念資料館を



プロフィール

英国サセックス大学卒業。米国ハーバード大学大学院修士課程を経て、ロンドン大学で博士号を取得。専門は比較文化論、異文化間交渉、言語学。1980年から広島大学総合科学部の英語教員となり、以来広島で数々の平和活動に携わってきた。1994年、同学部教授となり、2008年3月定年退職。趣味の合気道は6段の腕前で、現在は国際合気道連盟の理事長を務める。広島平和文化センター評議員、広島市外国人市民施策懇談会座長、広島日英協会理事。前広島インターナショナルスクール理事長、前広島県警東広島署警察協議会委員。

“平和について思う”

広島と平和
peace

広島大学名誉教授

ピーター・ゴールズベリ

訪れるのですが、反応はみんな同じ。一九四五年八月六日に、この街と、ここで暮らしていた人々に起こったことに対する、深い衝撃です。この衝撃は必然的に、「ヒロシマの心」―世界恒久平和と核兵器のない世界という悲願―についての熟考をうながします。

私もこのことについて考えてみたいと思います。

分厚いオックスフォード英語辞典には、「平和」について幾つか定義が載っていますが、主なものは二つあります。

一、戦争や敵対行為からの自由、または、その停止状態。他国、他共同体との戦争状態にない国や共同体の状態。ここで平和は、何ががないこと―この場合は戦争や戦闘―によって、いわば消極的に定義されており、国家の様な大きな組織に適用されています。しかし、平和の実際の状態について積極的に述べているわけではありません。二、他者との諍いや不和からの自由。友好的状態。協調、親善関係。

二番目の定義は個人に適用されており、狭義の定義といえますが、より積極的で、友好、協調、親善の状態について述べています。「ヒロシマの心」や広島市の「国際平和文化都市」という名称が意図するところの「平和」は最初の定義だけでなく、両方の定義の意味において理解する必要があるでしょう。

最初の定義は国や共同体に関する

もので、秋葉市長を長とする大きな共同体としての広島市にあてはまりません。

毎年八月六日に行われる平和記念式典は、国際的に重要な意味を持つ大きな行事です。広島は、そして八月九日の長崎の原爆の日について報道されない国は殆どありません。長崎市とともに広島市は、世界平和と核兵器廃絶という大問題に全世界の関心を集めるために活動してきました。平和市長会議や、世界に被爆の実相を伝えるための数々の国際交流は、この任務に不可欠な取り組みです。この点において、広島市―市長、市役所、及び平和文化センター―はこの任務をこの上ない水準で遂行しています。また、言うまでもないことですが、全ての目的を達成し、全ての核兵器が廃絶されるまで、この任務の継続が必要不可欠です。しかし、この任務が十分に達成されたとしても、それによって全ての戦争や紛争が消滅するというのは短絡的な考えです。核兵器が廃絶されても、テロや海賊行為、武力衝突を含む政変が起こる可能性はまだ残されているのですから。

けれども、二番目の定義は所謂「た広範囲の、より困難な問題に大いに関連があります。この定義は人と人との間の友好、協調、親善の状態に関するものだからです。平和な状態とは、人と人との間の友好状態の維持と発展を無条件に必要とするものなのです。

広島について言えば、「人」とは、広い意味での「広島の人々」のことであり、日本人、在日外国人、長期または短期の滞在者を含みます。「国際平和文化都市・広島」は、この意味でも、この上ない水準であるべきです。

広島は、大勢の私のような人々にとても故郷であり、海外旅行から広島に戻ると、とても嬉しいものなので。私の場合、だいたい新幹線で広島に帰ってきます。新幹線は最後のトンネルを抜けると減速し始め、長い高架の上を広島駅へ向かい、街の上を滑ってゆきます。南の方を見れば素晴らしい街の眺めが広がっています。旅行者にとっては、これが広島での最初の見ものとなります。私にとっては、英語のことわざでいうところの「Absence makes the heart grow fonder. (離れていると思いが募る)」です。

そんな私でもなお、広島市―広島の人々―は、名称としてではなく本当の意味で「国際平和文化都市」をつくる義務―あるいは課題―があると感じています。国際平和文化都市という名称は、たまたまのスローガンにも、名称どおりのものを描写した正確な記述にもなりうるのです。しかし、名と実が一致するには、また時間がかかりそうです。

平和文化センターとの長年の関わりから、広島には地域レベルでの広範囲の取り組みや事業を生み出す膨大な蓄意の貯蔵があり、しかもおそらく、その大部分はまだ手つかずのままだと、私は確信しています。機会さえ

あれば、人々は心から人を助けたいと望んでおり、広島が本当に平和の象徴として特別な存在であってほしいと願っているのです。

一方で、長い間に暮らしてきた経験から、私は広島市の別側面についても確信があります。広島は平均的な都市なのです。大都市ですが、機能は中心部に集中しています。にぎやかな所もあり、田舎の雰囲気を持つ静かな所もあります。だからこそ、ここに暮すのは心地よいのです。しかしやはり、同規模の日本の他都市が抱える多種多様な市民生活上の問題を同様に抱えている、平均的な都市なのです。

数日前、親友と夕食をとる機会がありました。彼も私同様、長く広島に住んでいます。彼は、市民が実際に参加できそうな平和活動やプロジェクトのリストを作っている、と話してくれました。私たちは、もっと草の根の活動が必要だ、という点で意見が一致しました。後日話をした他の友人たちも、この点について同意見でした。国際平和文化都市というのは素晴らしい名称ですが、まだ現実とのギャップがあり、そのギャップを埋めるためには、さらなる努力が必要なのです。

前述のように、私は「平和」について二つの定義をあげ、これを広島にあてはめてみました。二番目の定義は一番目の定義に勝るとも劣らないほど重要で、そして、実証するのがより難しい定義だと思います。

課題は膨大にあります。しかしそれは、克服する価値のある課題なのです。

“ヒロシマの心”を発信する人々

「平和で美しい地球の未来を願うメッセージをこめて、日本の絵本を贈ります。」

—ひろしまと世界を結ぶこども文庫—



世界には、まだまだ原爆の実相を知らない人たちが多くいます。「ひろしまと世界を結ぶこども文庫」は、十五年にわたり、世界中の国と地域に、原子爆弾のおそろしさや地球環境の大切さを伝える絵本を贈る活動を続けてきました。

この活動について、会の代表世話人の柴田幸子さんにお話をうかがいました。

活動のきっかけについて教えてください。

一九九五年、中国・北京で開かれた第四回世界女性会議のNGOフォーラムに、広島市から市民十一名が派遣されました。私もその中の一人でした。私達は「核兵器の廃絶と平和の創造」をテーマにワークショップを開き、原爆の恐ろしさを伝えるために、資料のひとつとして絵本を展示しました。この時、民族や文化、言葉の壁を越えて直接メッセージを伝えることのできる絵本の力を実感するとともに、世界にはまだまだ原爆の実相を知らない人たちが多いことも痛感しました。帰国後、フォーラムに参加した十一名で、自分たちに出来ることから始めようと、「ひろしまと世界を結ぶこども文庫」を設立し、中国の子どもたちに平和や環境についてのメッセージを伝える絵本を贈ることを始めました。一九九六年のことで、これがこの活動の始まりです。

現在では世界に向けた活動をしておられますね。

中国の子どもたちに絵本を贈る活動をするなかで、いろいろな問題がありました。特に資金の面で送料の負担が大きく、会費や補助金、寄附金だけでは不足がちとなりました。広島には多くの国の人々が訪れます。そこで、そんな機会に手渡ししているというところにしたのです。

一九九八年、私たちの会は「ひろしまと世界を結ぶこども文庫」と名称を改め、広島を訪れる様々な国の

人たちに絵本を手渡し、広島市民の「平和を願う心」を伝える活動として新たにスタートしました。それまでの活動を通して知り合った多くの人たちからご協力を受け、その年、原水禁世界大会に招かれて広島を訪れたバキスタンの物理学者アブドラ・ナイヤー博士に絵本数冊を手渡しすることが出来ました。博士はその本をイスラバードの高校に届けて下さり、現地の高校生からは本を読んだ感想が送られてきました。

広島は、多くの国際会議が行われる都市です。平和市長会議が行われた際には、会議場のロビーに私たちの活動を紹介するブースを設けて、会議に参加した市長の皆さん一人一人に、絵本を手渡すことが出来ました。また、国連が実施している「国連軍縮フェロシッパ」の一環として、毎年、各国の若手外交官が平和学習のために広島を訪れます。この人たちにも二〇〇二年から絵本を贈ってきました。

その他にも、広島市の姉妹・友好都市の図書館や学校にも相互訪問などの機会を利用して絵本を贈ることが出来ました。また、JICA（国際協力事業団）中国センターのご協力を得て、JICAから

To whom it may concerned

In 1995, we participated in the NGO Forum at the Fourth World Women Conference held in Beijing. In the forum we discussed the topic 'The Abolition of Nuclear Weapons and Creation of Peace', a problem the citizens of Hiroshima, along with people from all over the world, have been tackling for many years.

This beautiful earth and its abundant greenery have existed for over 46 billion years. However humanity in the twentieth century is destroying the earth.

In considering this very important issue of the earth's survival, we send out our wishes for a peaceful future for this earth, and are delighted to donate these picture books from Hiroshima, in Japan.

Children's Library Linking Hiroshima and the World

こんにちは！
私たちは、1995年、北京で開催された第4回世界女性会議のNGOフォーラムに参加し広島市の市民が取り組んできた「核兵器の廃絶と平和の創造」について世界の人々と話しあうことができました。
46億年という長い長い時間をかけてつくられた、水と空気と緑豊かな美しい地球が、いま私たち人類によって壊されようとしています。このとても大切な地球の問題を、世界の人たちと共に考えるために、平和で美しい地球の未来を願うメッセージをこめて、日本の絵本を贈ります。
＝ひろしまと世界を結ぶこども文庫＝

絵本に添えて贈られる手づくりのメッセージ

世界各国へ派遣される人たちを通して絵本を贈ることもできました。

どんな絵本を贈るのですか。

現在主に贈っている絵本は、「絵で読む広島原爆」那須正幹作、西村繁男絵、福音館書店出版の英語版、「H I R O S H I M A」田中利幸訳です。これは絵本ですが、被爆当時の様子が正確に描かれているとともに、科学的な側面からも解説されていて、資料的価値の高いものです。この本に私たちの活動の趣旨を書いたもの（日英語）を添えて贈っています。

また、国連軍縮フェロシッパの団長として何度も広島にいられているポランドのイエルジー・ザレスキー氏には、毎回異なる絵本を選んで贈っています。そして、その本が今、ジュネーブの国連図書館に蔵書として置かれていることを知り、とてもうれしく思っています。

今後の活動について聞かせて下さい。

様々な出会いを通じて、平成二十二年末までに、世界の百四十七カ国の九百四十九カ所に、千八百七十六冊を贈ってきました。

また、直接お会いすることが難しい方にも、各国の大使館を通じて絵本を贈りました。そして、二〇〇八年のG8（主要国首脳会議）下院議長会議のホスト役の河野洋平氏（元衆議院議長）や、同会議に参加されたナンシー・ペロシ米国下院議長（当時）、さらに二〇〇九年に来日されたヒラリー・クリントン米国国務長官から、お礼状が届くという、うれしい出来事もありました。

絵本は人間が創り出したすばらしい文化です。私たちはその絵本を通して世界の人々と交流し、思いもかけない方々との様々な出会いをすることもできました。また、すばらしい仲間と多くの人々に支えられ、活動が続いてきたことに感謝しています。

そして世界のどこかで私たちの贈った絵本がずっと読み続けられ、平和のメッセージが届くことを願いながら、これからもこの活動を続けていきたいと思っています。

ありがとうございました。

（二〇一一年二月三日取材）